

大都市のマーヅナルな男たちの比較研究：

日本の「寄せ場」、アメリカのスキッド・ロウ

トム・ギル

はじめに

世界の産業国家の大都市には、みなそれぞれ「スラム」と呼ばれる地域が見られるが、その特徴は国家・都市・時代によって大いに変わってくる。社会学者は、スラムの種類を研究し、様々な分類を付与してきた。例えば、少数民族のゲットー (ghetto)、腐敗した盛り場 (tenderloin)、郊外の老朽団地 (sink estate)、などである。

こうしたスラムの種類によっては、内部で家族生活が営まれるケースが多いが、本稿では、単身男性が住むスラムの一種類を考察する。このようなスラムの最も有名な例はアメリカのスキッド・ロウ (skid row)¹⁾と日本の寄せ場・ドヤ街であり、アメリカ人と日本人の社会学者の何人かがこのような2つの単身男型のスラムをとりあげている。本稿では、寄せ場とスキッド・ロウの共通点・相違点を見ながら、その構成・維持・変容における社会経済学的、そして文化的な要素のウェートを分析する。

1. 寄せ場とは？

「寄せ場——それは日本の下層社会である。そこでは人間が無慈悲に奪われる。だからこそ人間への激しい希求がある。熾烈な闘いがある。」私の言葉ではない。この12年間、日本寄せ場学会が出版する「寄せ場」というタイトルの年報は、必ず表紙にこの言葉が書いてある。そしてこのように

続く。「いまー寄せ場研究は、寄せ場の現実に切り込み、これを再構成し、そして寄せ場に投げ返さなければならない。」

このような言葉から、場合によって「寄せ場」は非常に大きな意味を持つことがあると分かる。「特殊地帯」という表現は差別用語とされがちであるが、「寄せ場」がその存在を知る日本人の頭の中に「特殊」な意味を持つのは事実だと思う。しかしその意味は、人によって異なる。汚い、臭い、危ない、避けるべき場所だとする人がいれば、かえって寄せ場学会のメンバーのように、その厳しい環境の中で生きて行くことが「普通」の人間より豊かな人生経験になるのではないかとする人もいる。

具体的な定義から始めよう。寄せ場は、文字通り、「人々を寄せる場所」である。その「人々」とは日雇労働者である。日雇労働者は一週間やヶ月単位で働くケースもあるが、文字通り一日契約で働くことがよくある。

日本の主な寄せ場は大阪・釜ヶ崎、東京・山谷、横浜・寿町、名古屋・笹島、川崎・ハラッパ、広島・ドン、福岡・築港である。「寄せ場」と「ドヤ街」という二つの表現が不注意に使われるケースが多いが、同一のものではない。「ドヤ街」は、「ドヤ」という安いホテルが集中する場所である。釜ヶ崎、山谷と寿町の場合、寄せ場(労働市場)とドヤ街(簡易宿泊所の街)という両機能が一緒になっているが、その他の、より小規模の寄せ場は単なる労働市場であって、ドヤ街ではない。

ところで、「ドヤ街」は「特殊地帯」と同様に差別用語として批判されがちだが、日雇労働者にとっては頻繁に使う言葉である。むしろ、社会学者が好む「寄せ場」という言葉を日雇労働者自身が使うことはあまりない。彼らは場所の実名を使う。例えば釜ヶ崎は「カマ」、山谷は「ヤマ」、寿町は（横浜の）「ハマ」と呼ばれる。

寄せ場では、様々なフォーマルあるいはインフォーマルな仕事の探し方があるが、私の主なフィールドワークの場である横浜・寿町では、主にヤクザに支配される青空市場と政府当局が運営する職安という構造が見られる。

青空市場は以前から変わらず、最大の仕事の源である。日雇労働者は朝早く（普通は午前5時頃）寄せ場の道路に出て、「手配師」という仕事の仲介人を使う。手配師は路上で日雇労働者と交渉をする。手配師はヤクザの関係者もいれば、独立した商人、建設や船舶の会社の代理人もいる。手配師は「ピンはね」と呼ばれる手数料を取って商売をする。これは賃金の3割程度が普通だと言われる。ヤクザ系ではない場合、ヤクザに「ショバ代」を払わなくてはならないこともある。例えば、私が1993年に知り合った横浜の船舶会社のリクルーターは、毎月10万円を相愛会という組織に支払っていると述べていた。彼の会社は忙しくない時5人～8人、忙しい時は70人までの日雇労働者を使っているそうだ。企業の規模を問わず、ショバ代は月10万円だと言った。相愛会とは、比較的小さな暴力団連合会である。横浜には、稲川会と山口組という大規模暴力団連合会が活躍するが、おおざっぱにいうと稲川会は主な盛り場の売春・麻薬・ギャンブルを、山口組は横浜港湾の利権を、それぞれ押さえている。寄せ場関連の利権は比較的に小さいということもあり、割合弱い相愛会に残されているという仕組みだと思われる。ちなみに相愛会の組長は在日韓国人である。

名古屋の場合、笹島で日雇労働者を雇う業者は毎月3万円程度を「名建親睦会」という組織に支払っている。これはやはりイナバチ会という暴力団の隠れ蓑である。名古屋の暴力団のうち、このイナバチ会だけは山口組に入っていない。つまり、ヤクザの世界の中でも、寄せ場は一流ではなく、二流・三流の暴力団の縄張りでありがちである。

「立つ」の意味

さて、日雇労働者と手配師の間の人間関係は大いに経済的要因に影響される。日雇労働者は俗語で「タチンボ」と呼ばれることがあるが、不景気の時、日雇労働者は「アルキンボ」になる。つまり、仕事が少ないときは、慌てて手配師を探し回る。逆に、労働力不足のとき、手配師の方が焦って、歩いたり走ったりして労働者を探し、現場に行くように説得しようとする。なお、人によって、「立つ」と「歩く」は全然違う意味を持つ。寿町で一年間不法就労をし、その間の自伝としてUnderground in Japanという本を書いたフィリピン人のレイ・ベントゥーラ（Rey Ventura）はこう語る。

「立ちんぼの男たちは娼婦のようなものだ。雇主たちは鋭く目を光らせて、ぼくたちを値踏みしようとする。彼らは若くて丈夫で、力はあるが害のなさそうな者を好む。．．．立っているところを見せるのも大切だ。坐りこんでいると、仕事場でもただぶらぶらしているだけだろうと思われかねない。

サチョーたち（“sacho”：日本語の『社長』のタガログ語化：雇主や親方や手配師、ボス役のだれでも）はぼくたちを上から下まで眺めまわし、こちらは知るかぎりの方法でいいねいあいさつする。不合格を知らせる彼らのやりかたは、あいさつを返さないことだ。このちよつとした屈辱の儀式で、毎日が始まる。

そしてぼくたちは無条件で彼らの手に命をあずけるのだ。」(ベントゥーラ1993: 62-3)

つまり、ベントゥーラにとっては、「立つ」という行動には屈辱の意味がこめられている。自分を商品のように、買い手に見せるのだ。対照的に、釜ヶ崎で知り合った新谷登(しんや・のぼる)という日本人のベテラン日雇労働者はこう語った。

新谷：大阪では、日雇労働者は「アンコウ」とも呼ばれる。アンコウという魚はじっと海底で待っていて、より小さな魚が来ればそれを食べる。日雇は同様にいい仕事をじっと待つ。..²⁾

私：でも、ちょっと違うんじゃない？
だって、カマの労働者は待つのではなく、一生懸命に探しているように見えるけど。

新谷：確かにそうだ。本当に残念なことだ。俺が青年だった頃、釜ヶ崎の日雇はこういう情けない感じで仕事を頼み込むことはなかったよ。もうちょっとプライドがあったよ。仕事を頼み込むより腹を減らした方がましだった。

こう言って、新谷は昔の日雇の立ち方を見せてくれた。無関心な顔。腕を組んで、堂々と立つ。「たとえすごく腹が減っていても、たとえずっと食ってなくても、それでもプライドが残る。武士道ということ知っている？ 本物の侍は絶対に衣食住を人に頼まない。数日食ってなくても、そういう素振りを見せない。俺たち、日雇もそういうものだった。手配師は来るだろう。俺たちはただ立つだけ。作業服を着て、道具を持っていることで仕事をやる気があると相手に見せる。すると手配師は『新谷さん、今日はちょっと手不足だから、手伝ってもらえるかね？』と言って、俺は何も言わずに、マイクロバスに乗るわけ。それはまだ

まだ俺のやり方だし、周りを見れば動かない年上の人を見かけるけど、残念ながら俺達のごく少数になってしまった。別に人のせいにするつもりじゃないけどね、特に今、不景気だから仕事がうんと少ないからしょうがないだろう。それにしても、残念だな。」

(フィールドノート、1994年8月6日)

ベントゥーラと新谷の話それぞれ物語るナラティブとして読むのなら、前者は第三世界から来た肉体労働者に対する日本の採用者の蔑視を痛感する。しかし、採用者が寄せ場に来る理由は何といても労働力が必要だからというわけで、新谷の態度は、手配師と日雇の力関係が必ずしも一方的なものではないという認知を反映する。結局この二つの「立つ」の解釈の差は日本人と外国人の差よりむしろ、寄せ場の労働力不足時代の経験の有り無しの差であろう。新谷の「道具」への言及に見られるように、職人としての技や道具の有り無しもその解釈に多少影響すると思われる。

ところで、ベントゥーラの発言から、彼は売春婦を蔑視すると分かるが、デイ(Day 1999)のロンドンの売春婦の論文では、場合によって売春婦もプライドを持って、単なる商品化されるものではなく、自分の肉体と「技」を商品にする事業家というセルフ・イメージがあると指摘されている。彼女たちのナラティブはある種の日雇労働者とかかなり似ている。とにかく、売春婦と日雇労働者の共通点として挙げられることは、やはり商売するとき毎回毎回買い手と交渉し、仕事をするかどうかを自分で決めることである。この点が、大都市の労働者のほとんどの大きな違いである。毎日同じことをボスの命令に従ってやるのではなく、ある程度、自分で選択、決断する自律的な存在である。

とにかく、ベントゥーラと新谷という極端に違うナラティブから見えるのは、日雇

労働のコンテストされる文化的な意味である。私が寄せ場に出合った労働者にも、やはり、その身分を積極的な選択とみなす人もいれば、単に人生に失敗したとしか思わない人もいた。

当局の役割

日本の中央政権と各都市は昔から日雇労働と玉虫色な、矛盾だらけの関係を維持してきた。16世紀の末、所謂「自由労働」は安定した米の収穫と封建的な主と使用人の関係を脅かすとして、豊臣秀吉が日雇労働を厳しく管理しようとした。だがやはり江戸時代の町作りや城作りには膨大な、かつ順応性のある労働力が不可欠であった。つまり自由労働は必要であると同時に「危ない」ということで、当局は色々工夫して、推進と制限を同時に行った。1788年で隅田川の河口で設立された「人足寄せ場」という強制労働収容所はその一つの有名な例であり（滝川1994年）、これは現在の「寄せ場」の語源だとされる。

20世紀の日本においても、その「推進と管理」のアプローチは崩れていない。特別な日雇向けの職業安定所は産業革命以来存在し、現在主な寄せ場に見られる。釜ヶ崎、山谷、寿町にはそれぞれ2ヶ所ずつの職安がある。その一つは中央政権（労働省）の施設で、もう一つは県・市の外郭団体が運営する（ギル1999年）。建前として、その目標は無法の青空労働市場を無くすことであるのだが、今でも寿町の職安は日雇労働の雇用のせいぜい10%しか管理していないと職安の職員が私に認めている。山谷の事情は寿町のそれとあまり変らない。一方釜ヶ崎の当局は「相対方式」という制度を用い、路上手配の免許を発行することで、市場のより大きな部分をよりルーズな形で管理している。

労働省の職安で登録すると労働者が自分の顔写真や登録番号付きの「日雇労働者手帳」（通称、「白手帳」）を発行してもらい、

これを持つと日雇失業保険に加入できる。二ヶ月に26日間以上働くと、その次の一ヶ月は、仕事を取れない平日、一日7,500円の「あぶれ手当」が手に入る。この制度は当局の日雇労働者に対する態度の現れである（ギル 1999）。臨時労働力の有効性を認め、日雇労働で何とか生活できるようにしてくれる。だが一月13回程度仕事を確保する能力が無くなれば、保険加入者の資格を失って、収入が劇的に減る。すると失業から貧困、貧困から野宿、野宿から野垂死という過程が一気に加速する。建設業と港湾に必要な労働力を保証し、要らない労働者を急速に処分するという制度なのである。

2. スキッド・ロウとは？

私はよく日本人に「イギリスにも寄せ場やドヤ街みたいなのところがありますか？」と聞かれる。もちろんイギリスにはスラム街があるし、不安定労働もある。しかし寄せ場のような「臨時労働者が毎朝大勢集まる労働市場」、ドヤ街のような「(主に) 単独男が使う簡易宿泊所がたくさん集中している地帯」が見当たらない。ところが、アメリカにはかなり似た存在がある。それは「スキッド・ロウ」である。

この事実そのものには意味があると思う。本質主義的に表象された「日本」と一枚岩的なものと捉えられる「西洋」が比較されることがまだまだ多いと思うが、この寄せ場・ドヤ街現象においては、単純に言えば日本とアメリカは似ているが、イギリスや他のヨーロッパの国々は違う。

さて、小学館ランダム・ハウス英和辞典によると“skid row”は「(米・カナダ俗) どや街(のような所)。A skid row bum、どや街にいる飲んだくれ [ぐうたら]。」つまり、(差別用語としての)ドヤ街、主流社会から転落した者の集まりというような感じである。

そういうと、私が先ほど描写した「労働

者の街・寄せ場」とかなり離れたイメージである。ところが、skid rowの意味はこの百年間、大きく変わってきた。一般のアメリカ人に「skid row」の語源を聞くと「on the skids」の関連語だとよく聞かれる。「skids」は「滑り台」や「滑りやすいところ」ということで、人が「on the skids」であれば、その人が「滑っている」、つまり、「落ちている」、社会・経済的に失敗に向かっているということである。そして、滑ってしまったら、結局ホームレスになってしまって、他の「滑り者」（落ちこぼれ）と「並んで」、skid row、「滑り者並び」という最低の場所で人生が終わってしまう。

ところが、この広く信じられている説明は事実とは違うのである。元々スキッド・ロウは社会・経済的な失敗と特に関係がなかった。最初のスキッド・ロウのスキッドは文字通りの「滑り台」だった。その滑り台はワシントン州シアトル市にあった。シアトルは山林に巻き込まれ、山林業は昔から大事な産業である。世紀の変わり目あたり、ヘンリー・イエスラー（Henry Yesler）という人の製材工場がその山の麓にあった。木こりたちは山の上の木を切って、一種の滑り台を使って丸太を下の製材工場に送っていた。その滑り台の横の通りに、木こりが使う安いホテル・バー・レストランが並んでいて、その「滑り台通り」は「スキッド・ロード」と呼ばれるようになった。後にその名前は他の同様な通りに当てはめられ、次第に「ロード」がなまって「ロウ」に変化したのである。今は“skid row”を「木こりの集まる町」という元々の意味で紹介しているのは大型辞典においてだけである。

戦前アメリカの大都市はだいたいスキッド・ロウ地帯があった。ロスアンジェルスはサウス・メイン・ストリート（South Main Street）、ボストンはスコレー・スクエア（Scollay Square）、ボルチモアは

プラット・ストリート（Pratt Street）、等（Hoch and Slayton 1989:29）。だがおそらくアメリカの最も有名なスキッド・ロウはニューヨークのパワリー（Bowery）とシカゴのホボヘミア（Hoboemia）であった。前者は19世紀の半ばまではブロードウェイの近くの庶民的な盛り場であったが、20世紀に入って次第に单身男のスラム街になった（Giamo 1989, Sante 1991）。後者はホボ（hobo、渡り労働者³⁾）がたくさん集まるボヘミア（bohemia、つまり放浪的なボヘミアン生活者の地帯）から作られた言葉である。

このホボヘミアは戦前のスキッド・ロウ分析の代表的著作、ネルス・アンダーソンの「ホボ」（Anderson 1923）で詳しく述べられている。日本の寄せ場学会が出版している「寄せ場文献100選」（寄せ場学会1990年）に唯一の外国製の本はこの「ホボ」である。アンダーソンは自分でホボの生活を経験してから中年になってシカゴ大学に入学し、大学院での研究を地元のホボヘミアで行って、この名作を書いた。スキッド・ロウを70年間研究している社会学のシカゴ学派はこの本から始まったと言っても過言ではないだろう。

「ホボ」を読むと、本当に驚くほど、戦前のホボヘミアが現在の日本の寄せ場に似ているとすぐ気がつく。主な共通点は以下の通り（アンダーソンの引用は全て拙訳）。

- I. 安いホテルとその窮屈な部屋。ホボヘミアでは、「オリ」（cages）と呼ばれている。個人部屋以外に、山谷や釜ヶ崎のベッド・ハウスに当たる、更に安い、6-8人の男が大部屋で寝るタイプもある（Anderson 1923:31）。宿泊のパターンも似ている：永住者がいれば季節によって2-3ヶ月泊まる出稼ぎタイプ、そして一泊だけで姿を消す放流タイプもいる。
- II. アンダーソンがホボヘミアに見た「少なくとも5種類」の男たちは寄せ場にも

見られる。季節の出稼ぎ (seasonal worker)；流動的な臨時労働者 (hobo)；「夢を見ながら放浪する」放浪者 (tramp)；「放浪も労働もめったにしない」怠け者 (bum)；そしてずっとホボヘミアに暮らし、近くで働く「ホームガード」(homeguard) はそれである (同89)。寿には、人数が少なくなってきたが、主に東北地方から冬、農閑期出稼ぎにくる労働者がまだいる。アンダーソンのhobo/tramp/bum区別は主観的な概念で、働くか働かないかは彼が言うほど明確なことではないが、寿にもあまり働かない人も結構いるのは事実である。そして同じドヤに、家具のまるでない部屋と、ものがいっぱいではほとんど動けない部屋もある。所有物の多い人は遠くに行って飯場で働いてもドヤ代を払わなくてはいけないので、主に近くで働く「ホームガード」タイプであり、所有物のない男はいつでもどこへでも行ける。日雇労働者の世界では物を持つことは必ずしも幸福と見なされると限らない。そういう理解はアンダーソンが見た浮浪者にも共通する。

III. ホボヘミアにも、公的市場と私的市場の二重労働市場がある。但し、公共職安は同じだがホボヘミアの手配師は寿町のほとんどの手配師と違って、店を持つ (同110-117)。

IV. ホボヘミアにも、労働人口の割合は不明だが、一日契約を専門とする労働者がいる (同117-120)。

V. ホボヘミアにはアルコール依存者はたくさんいた (同134-5) が、麻薬依存者はあまりいなかった (同67-9)。より一般的に言うと、スキッド・ロウは「飲んだくれの集まり」というイメージだが、ホックとスレートン (Hoch and Slayton 1989: 87) によると、今までのアメリカ・スキッド・ロウ研究ではアルコール依存者は、他の地域よりはるか

に多いが、まだまだスキッド・ロウ人口のごく少数である。同様に、30年間寿町でアルコール依存者サポートで働いている村田良夫さんによると、寿町の人口の3割程度は「何らかのアルコール問題があり、その半数強 (つまり、総人口の約15-20%) は依存者と呼ばれるでしょう。同時に、絶対禁酒者は約20%で国の一般人口の平均を上回る」(インタビュー、1994年11月19日)。麻薬の場合、寿町で出合ったディーラーによると、「患者」は30人程度で、寿町の人口の約1%である (フィールドノート、1993年7月7日)。

VI. ホボヘミアの人口は圧倒的に単独男が多かった。アンダーソンらの調査では8割ぐらゐは独身、5-8%は既婚者、残りは離婚者、やもめ、別居者である (Anderson 1923: 137)。現在の寿町には既婚者は更に少なく、私が寿町で知り合った158人の日雇労働者の内、「女房と一緒に暮らしている」と言ったのは6人だけであった。

VII. 山谷と釜ヶ崎はそれぞれ風俗街の吉原と飛田の隣だが、ホボヘミアも売春街の側だった。「この女たちはMain Stem (文字通り、「主な軸」。ホボヘミアの中心) に暮らすのではなく、その隣に住む」(同142-3)。

VIII. ホボヘミアの近くには、小屋地帯があった。Flophouse (ドヤ) の家賃を払えない男が自分で小屋を作って、ちょっとした「小屋コミュニティ」で暮らしていた (同11)。寿町の場合だと関内駅のガード下にそういう小屋の群れがつい最近まで見られたし、山谷の場合だと隅田川に面する小屋やテントの長い列があるし、釜ヶ崎の近くの動物園の前にも大型テント村がある。

IX. アンダーソンが見たホボには詩を書くことを趣味にする男たちが多かった (同194-214)。寄せ場労働者の間にも詩人

がかなりいて、「寄せ場詩人」という雑誌さえある。単独男の自由と寂しさはスキッド・ロウと寄せ場の詩人の共通なテーマである。

X. ホボたちを労働組合に組織させようとする、あるいは労働問題や福祉問題の関連でホボたちと団結に戦う左翼の集団は色々あった(同230-249)。この集団はそれぞれ路線が違って、しばしばお互いに喧嘩をし合っている。残念ながら、全く同じ問題は寄せ場の戦後運動史に見られる。派閥戦争や内ゲバの繰り返しである(梶1977、船本1985など)。

XI. アンダーソンのインフォーマントが家出をした理由としてあげた原因には以下が含まれていた：一時的な出稼ぎから何となく家に帰らなくなった、失業してしまつて収入がなくなった、身体障害や精神的問題からなかなか安定した仕事を望めない、アルコールや麻薬の中毒になってしまった、「人格が弱い」、個人的な危機から逃げなければならなかった、人種や民族差別、放浪癖(同61-86)。私は寿町や山谷でこのようなナラティブをすべて日雇労働者から聞いたことがある。

言うまでもなくアメリカの戦前スキッド・ロウと日本の現在の寄せ場の間に相違点もみられる。特に、

I. 労働者を使う産業が多少異なる。ホボたちはよく農業労働者として働き、アメリカの鉄道建設の黄金時代にはその線路を作る作業のために数ヶ月も遠い現場で働くことがあった。今の日本の日雇労働者は主に建設・土木産業で働いている。

II. アンダーソンは何回も「安い店」のような書き方をするが、私の経験では寄せ場の店は決して安くはない。むしろ外の店より値段が高いケースが少なくない。一日の労働で疲れた労働者は遠くまで行きたがらないし、賃金は現金の形でもら

って手に持っているので、ついカモにされることが多いという印象である。

III. 戦前・戦後問わず、スキッド・ロウの民族誌を読むと必ず物乞いの話が出る。私の経験では、ドヤ街では多少せびったりたかることがあっても、露骨な物乞いはあまりない。

3. スキッド・ロウの歩み

さて、80年前のアメリカの現象と今現在の日本の現象を比較する作業には価値があるのだろうか？

この質問に答えるには、まずスキッド・ロウの歴史を振り返る必要がある。労働市場としてのスキッド・ロウの盛んな時代は今世紀の最初の30年間であった。20年代にはもう下り坂にあった。シカゴのホボヘミアの人口は1907年に約60,000人(Solender 1911: 9)で、1923年に約30,000人に半減していった(ただし冬には倍増するが)(Anderson 1923: 13)。鉄道はほぼ完成していたし、農業の機械化も伝統的なホボの仕事次第に減らしてしまっていた。1930年代の大不況はさらに大きな打撃だった。そしてスキッド・ロウは少しずつ「労働者の町」から「脱落者の町」に変わった。このため、第2次世界大戦の後、「ホボ」というかなりロマンチックな言葉のかわりに、「スキッド・ロウ・バム」(skid row bum、スキッド・ロウのぐうたら)という差別用語がよく使われるようになった。アメリカの経済が成長し、仕事が出来人が段々安定した職業を見つけ、スキッド・ロウに行かなくなる。残るのは主に仕事の出来ない人という道筋だった。

人口が更に減って、1958年のmain stem(シカゴのスキッド・ロウ；もはや「ホボヘミア」が消え、その中心街だけが残っていた)の人口は約12,000人(Bogue 1963: 82)。他方、ニューヨークのパワリーのスキッド・ロウの冬人口は1949年に約

13,000人だったが、1971年までは3,000人に減少した (Bahr 1967: 42)。同時に高齢化は激しいペースで進んだ。アンダーソンが見たホボたちは主に18歳から35歳までの年齢範囲にいた。しかしボーグの1958年のアメリカ全国調査では、スキッド・ロウ人口の47%は年金対象年齢以上だった (Bogue 1963: 6)。バワリーの場合、1930年の人口の75%は50歳以下であり、1966年には75%が50歳以上だった (Hoch and Slayton 1989: 97)。同時に、主に労働階級の白人だったスキッド・ロウ人口に黒人やヒスパニックの人たちが次第に割合を増やしていった。

アメリカではスキッド・ロウは社会病理と見なされ、80年代以来、段々つぶされてきた。“Clean up skid row” (スキッド・ロウを一掃しろ) は政治家の決まり文句で、同時にケースによって都市の膨大化の結果、スキッド・ロウのある場所は一等地になり、ドヤを壊してミドル・クラス以上の住宅街にする金銭的なメリットもある。これは所謂 “urban renewal” (都市更新) 企画で、たくさんアメリカの都市に見られてきた。より俗語的な言い方では “gentrification” (高級化) である。スキッド・ロウの地域を「新住宅地帯」と指定し、ドヤの法律的な環境を極めて厳しくする。同時に家賃がドンドン上がり、レストランやバーが閉店してしまう。最後に、壊したドヤのところに高級マンションを建て、建設会社や不動産会社は儲けるし、町の自治会も「社会のガン、スキッド・ロウを洗い流した」と言い、支持率を増やす。このプロセスは Miller (1982)、Rossi (1989) や Giamo and Grunberg (1992) で描写される。

シカゴやロサンゼルスにはまだスキッド・ロウが残っているが、ニューヨークのバワリーの最後のバー (名前は Al's Bar である) は1993年のクリスマス・デーで閉店してしまった (Giamo 1994: 1, 15)。バワリー、多分アメリカの一番有名なスキ

ッド・ロウ、はこれで存在しなくなったと言っていいだろう。また皮肉なことだが、1995年5月8日の英サンデー・タイムズではバワリー地域がトレンドィーな若者の一流プレイ・スポットとして紹介された。高級化のペースは正に速い。

しかし、スキッド・ロウの住民たちが突然存在しなくなることはない。現在アメリカは深刻なホームレス問題に面している。スキッド・ロウがまだあったとき、一種のコミュニティーがあり、労働力供給機能がある程度果たしていた。今の米国の大都市では、どこへ行ってもホームレスを見てもおかしくないという現状である。この町中ばらまいている野宿者は所謂 “new homeless” と呼ばれる。そしてスキッド・ロウを潰したのは本当に良かったかという疑問を持つ人も多い。

4. 寄せ場とスキッド・ロウの比較の意味

寄せ場とスキッド・ロウの单身男のスラム街としての共通点はたまには研究者の目を引くことがある。歴史的な段階や各研究者の理論的な構えにより、その比較の結論が大分違ってくる。ここで5人の日米研究者の寄せ場・スキッド・ロウ論を簡単に紹介してみたい。

まず60年代の土田英雄 (土田 1966a、1966b) とカルロ・カルダローラ (Caldarola 1968) である。土田 (1966a) は1920年～1960年という時間枠を設定し、シカゴのホボヘミアを釜ヶ崎と山谷に比較する。その40年間では、

- ①ホボヘミアは労働者であるホボの街から「老令者・アル中患者・身体障害者などの都市生活の敗残者のたまり場」(土田 1966a: 204) のような場所になった。逆に、ドヤ街は明治時代の「木賃宿集中地区」からドヤ街に変身する (同203) と共に、「かつての貧民・窮民のウェイトがむしろ減少して、アンコ・立ちん坊

などと呼ばれる単身未熟練肉体労働者すなわち極めて流動的な移動労働者のたまり場に変質して行った」(同204)。

- ②ホボヘミアはヨーロッパ人移民者のスラム街→労働プール→「社会保障の谷間」へと、マクロ経済学的な要素に応じて変わるが、「東京・大阪の木賃宿街の成立・発展・変遷にはたえず行政的要因が強く作用していた」(同205-6)。必要な労働力を交通の便利な所に置くと同時に、問題を起こしそうな社会階級を警察の管理しやすい所に集中させる。つまり、米国と日本の比較は自由経済型と計画社会・経済型の区別である。
- ③ホボヘミアの人口は夏季30,000人冬期75,000人(1920年代)から約12,000人(1959)まで減少したのに、山谷は大正末の2,500人から60年代の約15,000人に増加し、釜ヶ崎は同時期に約4,000人から15,000人まで増加したという(同206-7)。「それは日本のドヤ街が労働力のプールとしての機能をますます発展させており」(同207)、「わが国のドヤ街が、現在のアメリカの状態をそのままうけついで行くとはとうてい考えられないだろうが」(同213)。

土田が「寄せ場」という言葉を全く使用せず、それと「ドヤ街」の区別をしないのは問題である。土田はホボヘミアとドヤ街の両方を社会問題として見なす一方、日本のドヤ街は労働市場としての機能的な面を残していると分析している。機能しているからこそ、スキッド・ロウとは逆に人口を増やしているというニュアンスを感じることができる。

ところで、同年の別な論文(1966b)では土田はかなり異なると思われる議論を展開し、ドヤ街がホボヘミアと同じパターンで変容する可能性を認めている。会社がより安定した労働力を確保するために、ドヤ街から離れた場所で「労務者専用アパート」を造るようになる傾向を見て、「この

ようにして特に壮年労働力が吸収され、ただ未熟練高齢労働者だけがとり残されて、それが家族制度や社会保障制度の網の目からこぼれ落ちてくるときに、わが国のドヤ街も現在のシカゴのドヤ街と類似した形態になる」と指摘する(土田 1966b: 63)。この論文のドヤ街の将来予測は1966aの論文よりのを得ている。しかし、ここではドヤ街はより病的に見なされ、「単なるドヤおよびドヤ街の改良計画ではなく、思い切ってドヤ街そのものを絶滅させようという計画」(同64)が必要だと主張する。残念ながら具体的な計画を提供してはいないが、土田が意味するのは多分「男が主流社会から離れ、ドヤ街に住むようになる必要のない社会を作る」だろう。しかし面白いことに、30年後でアメリカの貧困研究者、ジェンクス(Jencks 1994)は昔のスキッド・ロウ(つまり安い部屋+日雇労働市場)の再建をホームレス問題への対策として提案するのである。確かにジェンクスを批判する米国の学者もかなりいるが(例えばGiamo 1994: 6)、この「常識の逆転」は日米の差ではなく、この30年間の両国はホームレス問題を全く解決していないことを意味するのではなかろうか。

さて、カルダローラ(Caldarola 1968)は以上の二つの土田論の前者に近い。彼はイエズス会士の社会学者で、1964年で東京・横浜・名古屋・京都・大阪・神戸という六大都市でドヤ街の事情を統計的に調査した。労働条件、手配師の収入、飯場とドヤ街の相互関係、住宅事情、結婚状況など、当時の日本語の文献(土田のものも含めて)には見当たらないところまで、重大な情報を集めている。ドヤ街を同時期のスキッド・ロウと比べると、「驚くべき類似した特徴」(amazing traits of similarity同523)が見られるという。「二者はドヤ、安いレストラン、古物屋、行商人、家族のいない人、社会的に孤立している人、日雇労働者、ルンペンで代表されるし、同性愛、

売春やアルコール依存の率がみなそれぞれ高い」(同、拙訳)。しかしカルダローラは同性愛と売春の「高い率」の統計的な根拠を提出しないので、ここで彼の偏見を表現しているのではないかという疑問が残る。彼のドヤ街の人間関係に対する見方にも問題がある。彼によるとドヤ街には「共同的な生活のほぼ完全な不在」(an almost complete absence of community life 同513)があり、「ドヤ街は完全な匿名で生活を行う個人の集まりとして言い切れる」(同)。なるほど、個人主義者や一匹狼がドヤ街に多少いるが、男同士の間助け合い・仲間意識、日雇労働者としての文化的アイデンティティ、ドヤ街に対する叙情的な愛着、こういう現象を見なかったのはカルダローラが充分ドヤ街の社会に入らなかったからだと思われぬ。1946年から30年間以上山谷にいた梶大介の著書には寄せ場の共同的な生活・意識がよく表れている⁴⁾。

なお、カルダローラは以下の異なる点も指摘する。①ドヤの人口の33%は絶対禁酒者でボグのアメリカのスキッド・ロウ調査の人口の絶対禁酒者は15%にとどまった(Bogue 1963)。②スキッド・ロウの人はよく物乞いをするが、ドヤ街の人はしない。カルダローラはベネディクト(1946)の言葉を借りて、これは日本が「恥の文化」だからと言うが、なぜ「共同的な生活のほぼ完全な不在」の社会には「恥」があるか語ってくれない。③政治的に、ドヤ街の人は左翼でスキッド・ロウの人は保守的という傾向があった。④ボグがインタビューしたスキッド・ロウの人の5割以上は定期的に教会に行っていたが、ドヤ街の人は「宗教に関して知識も関心も全然なかった」(Caldarola 1968: 524)⁵⁾。⑤米国のスキッド・ロウは確実に縮小し、既に1950年あたりで総合人口が10万人を割っているとボグ(Bogue 1963: 8)が言うのに対し、ドヤ街の人口は増加傾向にあり、スキッド

・ロウの住民は主に老人なのに対し、ドヤ街には若者が圧倒的に多い。これから数年間ドヤ街の人口が増加する見込みだとカルダローラは言う。

その21年間も後で1989年に出版された青木秀男の文献は「ドヤ街」より「寄せ場」という表現を使うが、それとスキッド・ロウを比較したとき(青木1989: 54-57)、意外にカルダローラと似た結論にたどり着く。「①スキッド・ロウには、老年層が多い。寄せ場には、壮年層が多い。②スキッド・ロウには、労働「不能」の者と第三次産業就業者が多い。寄せ場は第二次産業就業者が多い。③(省略)④スキッド・ロウの人間関係は、匿名的、一時的、功利的である。．．．寄せ場では、．．．人間関係の秩序化・集団化がみられる。⑤、．．．スキッド・ロウは完全なアノミー社会ではない。スキッド・ロウ文化の中心は、アルコール常習者の飲酒文化である。．．．寄せ場文化は基本的に日雇労働者の生活様式としてある。そこでアルコール文化は部分的なものではない。⑥地域の社会的性格として、スキッド・ロウは、解体型スラムにより近い。寄せ場は、統合型スラムにより近い」(同56-7)。

この見解には一つ問題がある。まず青木は1989年現在の寄せ場とそれに近い時期のスキッド・ロウを、両方タイムレスな存在として扱う。実際は両方とも常に変わりつつある。彼はこの問題を意識し、注43で、「近年、寄せ場は、一方でスキッド・ロウ化」をしているとし、注44では「近年、労働者の高齢化がめだつ」と認めている(同67)。なのに、寄せ場とスキッド・ロウが同じ軌道にあるという結論に青木は違和感を感じる。彼はどうしても「飲むスキッド・ロウ住民」と「働く寄せ場住民」に執着する。寄せ場の労働供給の役割を非常に強く強調するため、彼らに関して「働き人(ど)」という造語を頻繁に使う(1989: 9等)。

そして左翼運動家の立場から書く青木はその「プロレタリアートの街」に過度の憧れを見せる。寄せ場では「人びとはくミジメ」から「ホコリ」へ移行する。『ヒトリ』から『ナカマ』へ移行する。寄せ場はめざされるべき『解放』と『自由』の千年王国となる」(同177)。残念ながら、こういうロマンチックな話を現在の、または1989年の寄せ場住民者に示せば皮肉な笑いを買うだろう。しかしながら、寄せ場とスキッド・ロウの区別として指摘するポイントはカルダローラのものとはあまり変わらないのに、結論は正反対(「完全なアノミーの集まり」対「ナカマたちの千年王国」)になるのは印象的である。各論者がいかに現実を自分のイデオロギーに都合よく解釈をしがちであるかを明白に示すのである。

アメリカン・スタディズのベネディクト・ジアーモはニューヨークのバワリー地区に関する著作(Giamo 1989)と米国のホームレス問題の共著(Giamo and Grunberg 1992)を出版してから一年間同志社大学に客員研究員として来日し、バワリーと釜ヶ崎を主な事例として日米のホームレス問題を比較する論文を書いた(Giamo 1994)。スキッド・ロウ関連の文学・美術も研究するジアーモは釜ヶ崎で調査した際「昔のニューヨーク・バワリーを思い出させられた、特に1930年代でレジナルド・マーシュが絵画で描写したバワリーである」(同12、拙訳)。ジアーモの見た釜ヶ崎は必ず昔のバワリーと比較される。「釜ヶ崎はかつてのアメリカン・スキッド・ロウと同様に自分なりのサブエコノミー、社会組織とはっきりしたサブカルチャーがある」(同)。違うのは「生産を熱望する日雇労働者」と「寄せ場制度」(同)。この、前の文献と随分違うスキッド・ロウのイメージはジアーモのフィールドサイトを反映すると思われる。バワリーの歴史はシカゴのホボヘミアやシアトルのスキッド・ロードのと違い、移民者のゲッター→劇場やレストラ

ンやダンスホールの大衆的な盛り場→貧民窟というようなパターンで、寄せ場の機能は割合小さな役割を果たしたと思われる(Sante 1991:11-17, Giamo 1989:1-30)。ただしジアーモは1916年以降のバワリーには「労働紹介代理店」(labor agencies)があったと述べている(1989:28)ので、寄せ場は日本の独特な組織という後の論文の主張には納得し難いのである。

私が知っている限り、最新の寄せ場・スキッド・ロウ比較論は吉田竜司のそれ(吉田 1995年)である。この論文では「ドヤ街」の簡易宿泊所の機能も含めてという意味で「寄せ場」という言葉を必ず「」で囲まれている(同78)。そして、現在の寄せ場と現在のスキッド・ロウの比較論者を批判しながら、20年代のホボヘミアと60年代の寄せ場というとても特定の比較を行う。スキッド・ロウについてはアンダーソンが相変わらず主なソースで、私が以上で示したものとかなり似た共通点のリストを提出し、(同80-92)。「『寄せ場』は日本のホボヘミアなのである」(同92)と結論している。20年代以降のホボヘミアの下り坂を文献で見ても、1940年まで「地図からは労働過程に付随する施設がなくなってしまったのである」(同93)。寄せ場は似たような運命を辿らない理由は特になく、その存在は「近代資本主義社会によって論理必然的に保証されたものではなく、姿を変えたり、あるいは消滅してしまうこともあり得る存在であるということをわれわれは確認しておかねばならない」(同94)。

それは確かであり、吉田が提案する「社会変動研究」のアプローチは寄せ場とスキッド・ロウに適用するべきだろう。ただ残念なのは、吉田の分析は一つずつの歴史的な瞬間で留まり、その変動の過程を充分認識していないことである。1995年の論文で1964年の釜ヶ崎を「現代」のように扱うには無理があるように思われる。それに、複雑な歴史の過程を単純化してしまうところ

もある。例えば、スノーとアンダーソンを引用し、「1920年代の中庸にホボの時代は終わった」（吉田 1995：92、Snow and Anderson 1993：14）と言い切るが、実は現在の米国でもホボが細々ながら存在する。毎年アイオワ州のブリット市（Britt, Iowa）で大会を行い、「女王」も選挙で選んでいる（Moon 1996）。社会学者はすぐある社会組織の「死」を発表する傾向があるが、場合によってはまだ生きていることもある。スキッド・ロウもそうである。ペアーは30年も前「少しずつ消えつつある」（Bahr 1967）と言ひ、ミラーは15年前スキッド・ロウは「解体されている」（Miller 1982）と書いた。しかしアメリカは大きな国である。パウリーが消えたとしても、西海岸のスキッド・ロウ（ロサンジェルス、ポートランド、シアトルなど）は解体されていない。特にロスのスキッド・ロウは都市の中央商業地区の隣で、そこに住んでいる数千人のホームレスはロスの地方政治の大きな問題点になっている（例えばGoetz 1992）。

そして、吉田の1923年のホボヘミアと1964年の釜ヶ崎の比較に1964年のホボヘミアと1995年の寿町のデータを加えてみると、寄せ場とスキッド・ロウが文化的に全く異なった空間であるとは言いきれないことが分かる（図1）。

ホックとスレートンがスキッド・ロウの連続性を強調し、60年代のスキッド・ロウは「ジャーナリストや学者が描写するアル中の墓場より（戦前のシカゴ・ホボヘミアの）メイン・ステムに近かった」、．．「住民者の大半は貧乏な労働者で一番よくある特徴は病理性ではなく貧困であった」（Hoch and Slayton 1989：94）と記述している。そして、アンダーソンは1940年まで労働紹介所が消えたと言っているが、1964年には1ヶ所だけが残っていた。

ところで、どちらかと言えば上の数字より実際は共通点が多いだろう。釜ヶ崎と寿町の手配師は店舗を使わないから「人材派遣業」はゼロになっているが、その機能はもちろんある。占い店もゼロだが、寄せ場労働者の多くは占いに興味を持っている。

図1 ホボヘミアとドヤ街の施設の時間的な変動の比較

	1. Main Stem 1923	2. Main Stem 1964	3. 釜ヶ崎銀座 1964	4. 寿交差点 1995
簡易宿泊所	8	9	7	36
人材派遣業	10	1	0	0
レストラン	7	3	4	9
バー	6	7	1	18
安い衣料店	5	3	1	1
ギャンブル系	2	0	1	10
占い店	2	1	0	0
薬局	1	0	0	1
伝道団	1	0	0	0
床屋	4	2	1	1
食料雑貨店	0	1	0	5
クリーニング	0	1	1	1
タバコ屋	1	0	0	0
酒屋	0	0	1	0
喫茶店	0	0	2	2
質屋	0	0	3	0
駐車場	0	2	0	2
空き地	1	8	2	1

1. Anderson 1923：15.

2. Hoch and Slayton 1989：93
(元々Kooi 1966：33).

3. 吉田1995：90
(元々住宅協会編1964).

4. 筆者のフィールドノート、1995.

酒は普段寄せ場の食料雑貨店で売られるからこそ「酒店」はないし、1923年のシカゴでは禁酒法のせいで酒店を作ることが出来なかったという特別な事情があった。たまたま上の統計で取り上げられる街の中心通りではないが、日本の大型ドヤ街は必ずキリスト教の伝道活動がある（救世軍のような団体があり、彼らと一緒に讃美歌を歌うと食事がもらえる。この習慣は米国では“sing for your supper”、日本では「アーメンでラーメン」と呼ばれている）、等。

終わりに

寄せ場とドヤ街の共通点・相異点とそれに関する文献を考えれば考えるほど一つの結論が浮かんでくる：この二つの組織を分けるのは文化ではなく時間とマクロ経済の要素である。日本のプライドを持つ日雇労働者対米国の寂しいアル中のような区別は通らない。戦前のホボの何割かには労働者のホコリと社会階級意識があったのは明らかである。アンダーソンに戻ると世界産業労働者組合 (Industrial Workers of the World)、米国史上一番ラジカルな労組のメンバーはかなりいたし、ホボヘミアの政治的な講演会に大勢の人が集まっていた。そして私の寄せ場の経験から言っても、労働者意識の強い人もいれば、自分が失敗者だと考えている人もいると言える。大きな区別を定義しようとする作業には無理がある。どこの、いつの寄せ場をどこの、いつのスキッド・ロウと比べるかによって、印象が異なってくる。年代学的に見るとこの2種類の都市地帯はほぼ同じ軌道に沿って動いている。主な相異は年代的なタイミングである。

つまり、米国は日本より早い時期から産業化・現代化・大都市化が進んだ。それに、臨時労働を必要とした産業はいつそう早く変わった：鉄道作りは主な鉄路の完成と共に終わり、農業が日本よりずっと早く機械

化された。ピークは1880年～1920年である。大不況から、長い、ゆっくりした、二度と復活のない衰退が始まった。寄せ場の場合、盛んな時代は戦後20年間ぐらい。ピークは1964年の東京五輪で、70年代のオイル・ショックはやはり長い、ゆっくりした、二度と復活のない衰退の始まりであった。

現在寄せ場の高齢化は一年に1歳に近いペースで進んでいる。平均年齢53-4歳；平均死亡年齢60歳ぐらい。仕事の数がバブル崩壊以降確実に減少している。例えば寿労働センターの統計によるとそこで取り引きされた労働契約人員延べ数（つまり、契約数×各契約の日数）は1985年から1995年までの10年間で145,160人日から52,738人日へと約65%も激減した。同時に、野宿者の人口は確実に増加している。釜ヶ崎周辺の10月1日平均ホームレス人数は91年で100人程度から、97年で400人を越えたし⁶⁾、その後更に増えている。98年の末、大阪府警300人が35人の野宿者のテントを釜ヶ崎から強制撤去した⁷⁾。毎日、ホームレスの人数がじりじりと上がっている。毎日、寄せ場とスキッド・ロウの差が少しずつ縮小している。20世紀の末からこの100年間の歴史を振り返ることにより、寄せ場とスキッド・ロウは根本的には同一のものだということが明らかになったと思う。

巻末注

- 1) 日本語の文献では「スキッド・ロウ」と「スキッド・ロー」という表現は共によく見られる。ここでは前者を選んだ。
- 2) ただし、「アンコウ」ではなく「アンコ」と発音されることがあり、語源も江戸時代に倉庫で働いていた「餡子仲仕」だという説もある (Leupp 1992: 134注60)。
- 3) この言葉は日本語化される時、「ホボ」、それに「ホーボー」と、両方ある。日本語の「方々(ほうほう)歩き回る」が語源で、19世紀アメリカの鉄道で働いた日本人移民労働者が輸入したという説さえある。ただし、“hoe boy”（「くわ小僧」、つまり渡り農業者）という、もう一つの説得力のある説明もある。An-

derson (1923) を和訳した磯村英一が「ホボ」にしているのが、本稿ではそれに準じた。

4) 例えば、以下は梶 (1977: 523) に書いてある詩の一部である。

さんやには なにもないが
たいようと
くうきと
ゆうじょうだけは いっぱいだ
だから さんやを あいし
さんやに いきていく
わたしたちのまち さんや
わたしたちのふるさとさんや

この詩は確かに「匿名」だが、これは決して「コミュニティー・ライフが完全でない」と言われるような社会の表現ではないと思う。しかも、カルダローラのインフォーマントの23%は家族持ちの既婚者だったので、完全に個人として生きているとはとても考えられない。

5) ただし、カルダローラが調査した628人のインフォーマントの12%は創価学会の信者だという意外なデータもあった (Caldarola 1968: 524)。創価学会のメンバーでありながら、礼拝に行かないし、個人レベルでも特に宗教的な行動をしていないという。

6) 朝日新聞、1997年11月24日朝刊、1面。

7) 京都新聞、1998年12月28日朝刊、1面。

参考文献

青木秀男

1989 『寄せ場労働者の生と死』明石書店

梶 大祐

1977 『山谷戦後史を生きて』(上、下) 續文堂
ギル、トム

1999 「寄せ場の男たち—会社・結婚なしの生活者」『共同研究・男性論』荻野美穂、西川祐子編 人文書院 (近刊)

住宅協会 (編)

1964 『大阪市全住宅案内手帳』

滝川政次郎

1994 『長谷川平蔵、その生涯と人足寄せ場』中公文庫

土田英雄

1966 a 「ドヤ街の比較研究」『大阪学芸大学紀要』15号203-215

1966 b 「ドヤ・ドヤ街・ドヤモン」『都市問題研究』18号54-64

船本州治

1985 『黙って野たれ死ぬな—船本州治遺稿集』れんが書房新社

ベントウーラ、レイ

1993 『ぼくはいつも隠れていた』松本剛史訳 草思社 (Ventura, Rey, 1992. *Underground in Japan*. Jonathan Cape.)

吉田竜司

1995 「ホボヘミアと『寄せ場』: 『寄せ場』の社会変動研究へ向けて」。『京都社会学年報』3号、1995年12月、77-96。

寄せ場学会

1990 「寄せ場文献100選」『寄せ場』第3号、187-207 現代書館

Anderson, Nels.

1923 *The Hobo: The Sociology of the Homeless Man*. Chicago and London: Phoenix Books. (磯村英一訳、『ホボ—無宿者に関する社会学的研究』、東京市社会局、1930年)。

Benedict, Ruth

1946 *The Chrysanthemum and the Sword*. Houghton Mifflin.

Bogue, Donald

1963 *Skid Row in American Cities*. Chicago University Press.

Caldarola, Carlo

1968 "The Doya-Gai: A Japanese Version of Skid Row." In *Pacific Affairs*, Vol.41 No. 4, 511-525.

Giamo, Benedict

1989 *On the Bowery: Confronting Homelessness in America*. University of Iowa Press.

1994 "Order, Disorder and the Homeless in the United States and Japan." In *Doshisha American Research*, Vol.31. Doshisha University.

Giamo, Benedict and Jeffrey Grunberg, eds.

1992 *Beyond Homelessness: Frames of Reference*. University of Iowa Press.

Goetz, Edward G.

1992 "Land use and homeless policy in Los Angeles". In *International Journal of Urban and Regional Research*, Vol.16, No. 4, 540-554.

Hoch, Charles and Robert A. Slayton

1989 *New Homeless and Old: Community and the Skid Row Hotel*. Temple University Press.

Jencks, Christopher

1994 *The Homeless*. Harvard University

- Press.
- Kooi, Ronald V.
1966 *Skid Rowers: Their Alienation and Involvement in Community and Society*. PhD dissertation, Michigan State University.
- Leupp, Gary P.
1992 *Servants, Shophands and Laborers in the Cities of Tokugawa Japan*. Princeton University Press.
- Miller, Ronald J.
1982 *The Demolition of Skid Row*. D. C. Heath & Co.
- Moon, Gypsy
1996 *Done and Been: Steel Rail Chronicles of American Hobos*. Indiana University Press.
- Rossi, Peter H.
1989 *Down and Out in America: The Origins of Homelessness*. University of Chicago Press.
- Sante, Luc
1991 *Low Life: Lures and Snares of Old New York*. Farrar, Strauss and Giroux.
- Snow, David and Leon Anderson
1993 *Down on Their Luck: A Study of Homeless Street People*. University of California Press.
- Solenberger, Alice
1911 *One Thousand Homeless Men*. Russell Sage Foundation.

ABSTRACT**Comparative Research on Marginal Men of the Metropolis**

— Japan's Yoseba, the USA's Skid Row —

Tom Gill

Among the various kinds of slum district to be observed around the world, the majority are characterized by some kind of family life. However, the skid row districts found in US cities, and the yoseba and doya-gai districts of Japanese cities, are/were largely inhabited by single men, whether bachelors, divorcees or widowers. This paper offers a brief description of both institutions, comparing their features and reviewing some earlier attempts at cross-cultural analysis of the two.

Yoseba are open-air casual labour markets, where day labourers gather early in the morning to negotiate work with specialist recruiters known as *tehaishi*. Doya-gai are urban districts with concentrations of cheap lodging houses where day labourers often dwell. In three famous cases—Kamagasaki in Osaka, San'ya in Tokyo and Kotobuki in Yokohama—the employment and dwelling functions are combined in a large-scale yoseba/doya-gai.

Skid rows are commonly thought of as districts populated by social failures, such as alcoholics and the mentally unstable. However, I try to show that the pre-war skid row was quite similar to the contemporary yoseba/doya-gai, with employment agencies arranging casual work for the hobos who lived in them and a culture oriented to casual labour. My key reference is Anderson's *The Hobo* (1923), which describes Chicago's Hobohemia district in terms that make it sound remarkably similar to Kamagasaki or San'ya. This similarity has struck several Japanese and American scholars over the years, and I discuss the contributions to this debate by Tsuchida (1966), Calderola (1968), Aoki (1989), Giamo (1994) and Yoshida (1995). Though the skid rows have suffered a steady decline over the course of this century, and in some cases have been destroyed in urban renewal programmes, I conclude that there is no fundamental cultural difference between them and the yoseba.

Japan's socio-economic environment has allowed the yoseba to retain their labour pool function long after it has largely disappeared from skid row, but the decline in the casual labour market which set in after the oil shocks of the 1970s, and has greatly accelerated since the bursting of Japan's "bubble economy" at the start of the 1990s, is making the yoseba/doya-gai districts look more like skid rows with every day that passes.